

郷土先賢の顕彰

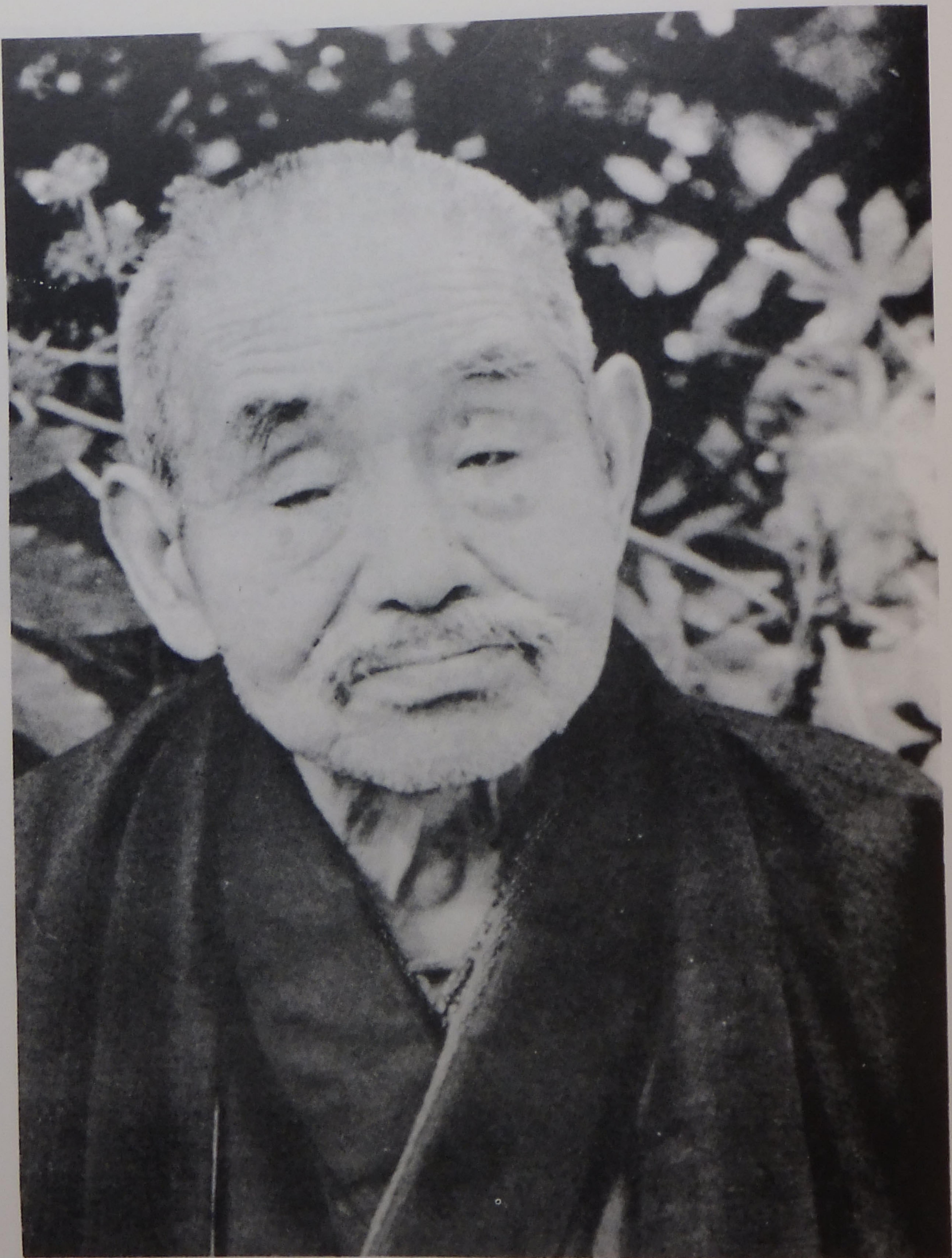
道一筋  
中井庄九翁傳

香川県 三豊觀音寺教育会

道一筋

中  
虎  
用

伝

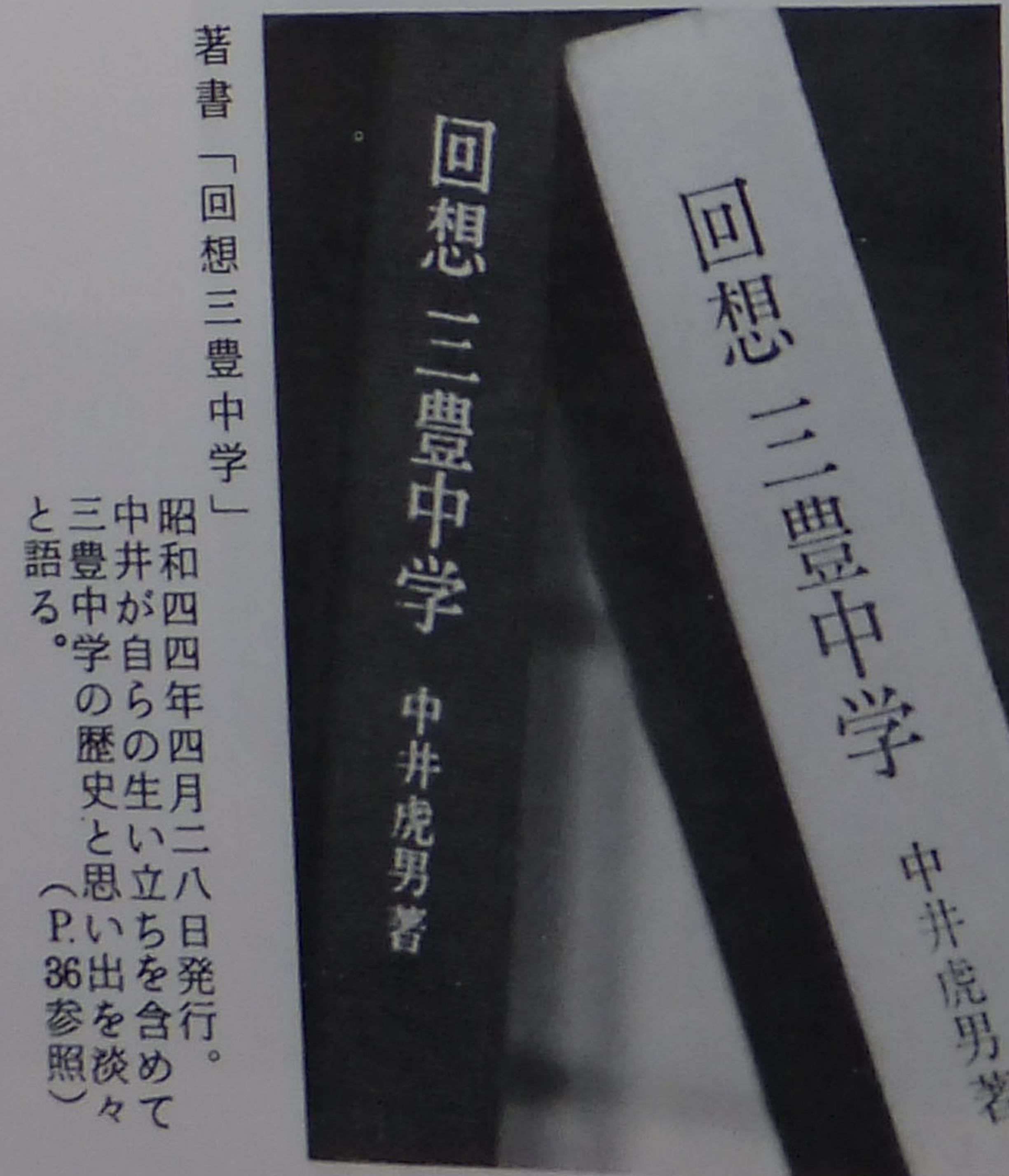


晩年の無長中井虎男

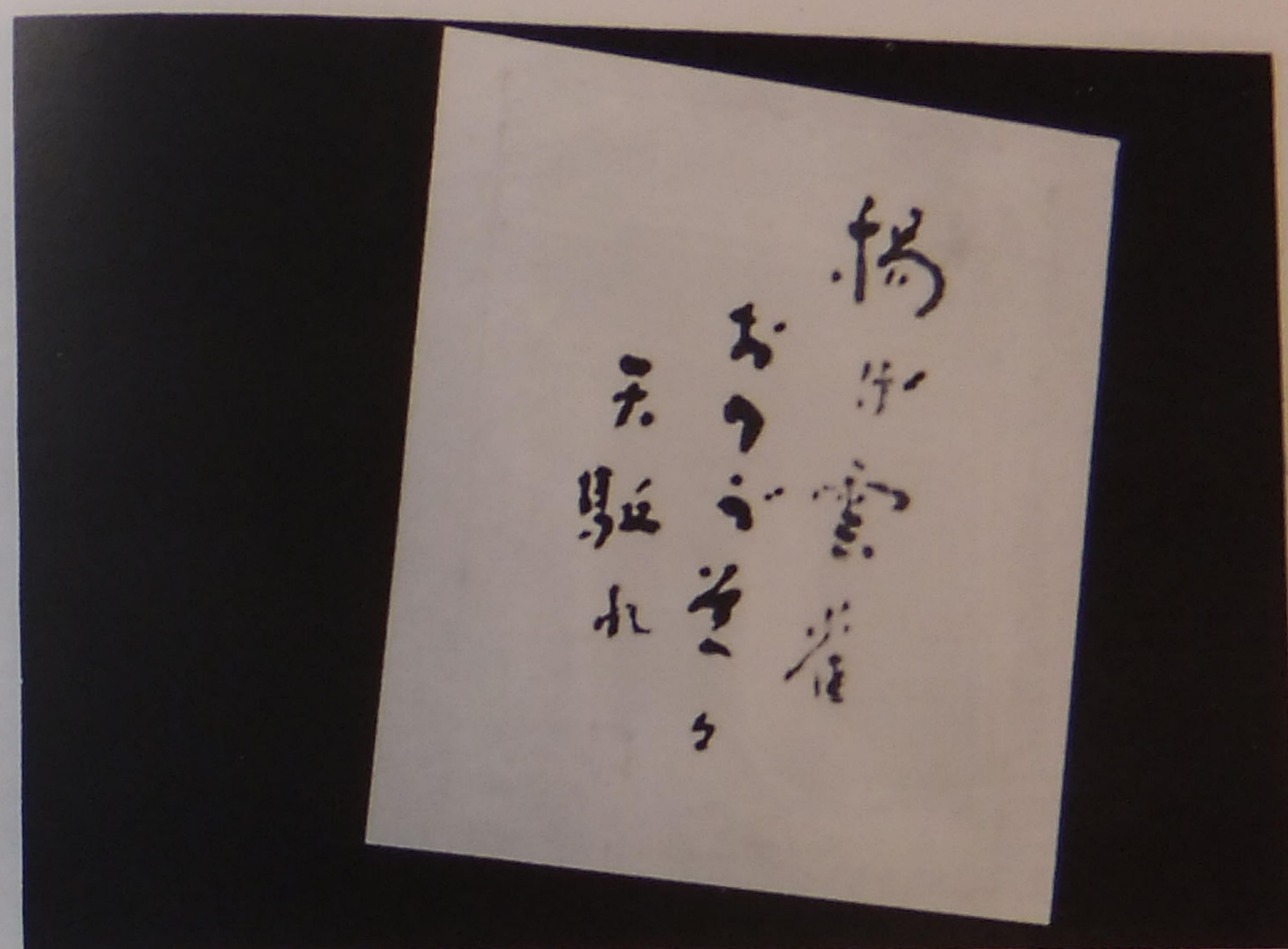


三中胸像除幕式

昭和8年4月28日。三中図書館前、夫人と共に列席した中井が謝辞を述べるところ。  
(P.30, 48参照)



著書「回想三豊中学」  
昭和四四年四月二八日発行。  
三中井が自らの生い立ちを含めて  
と語る。三豊中学の歴史と思い出を淡々と  
(P.36参照)を記す。



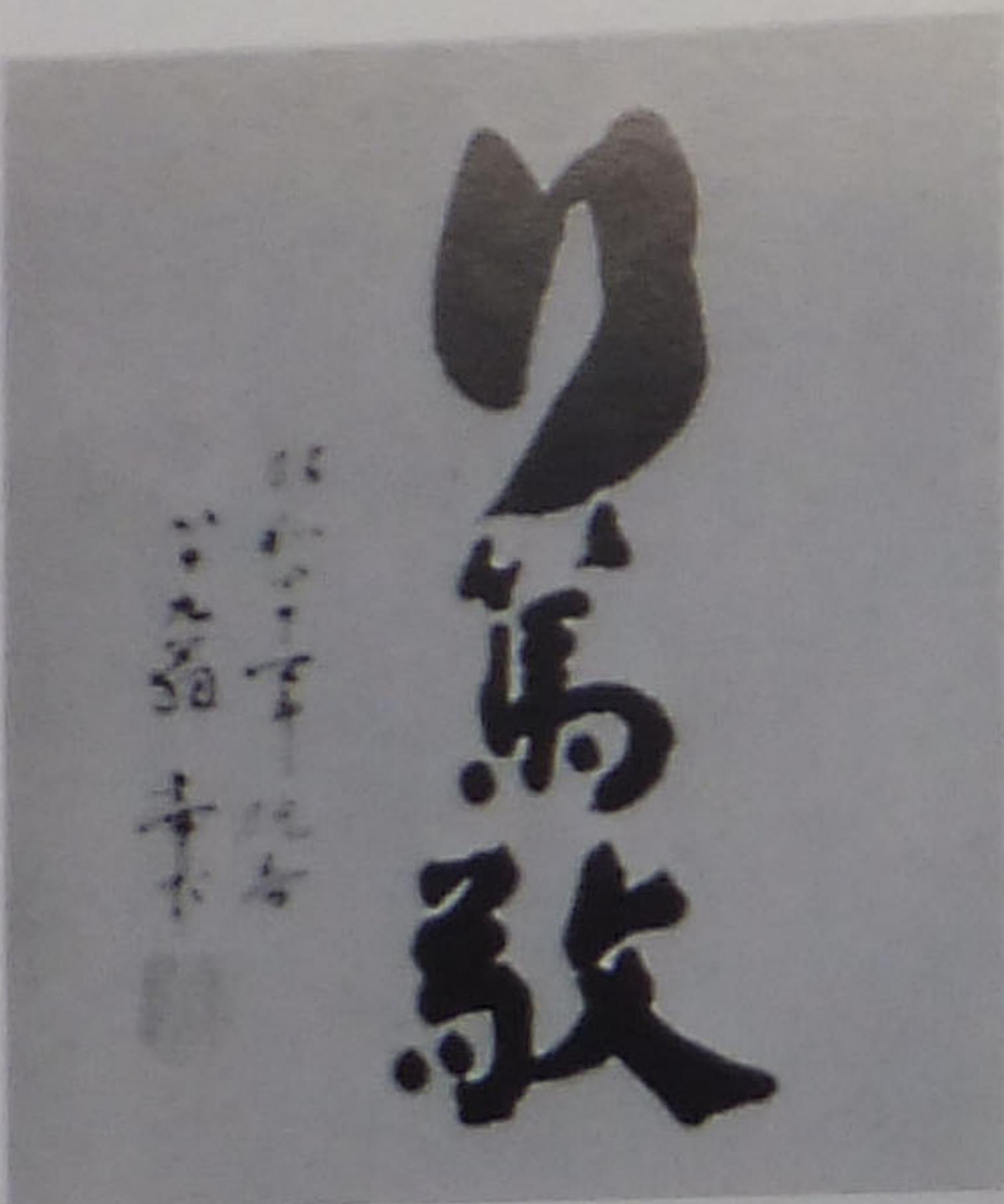
色紙「揚雲雀」

退職後も毎年参列して祝辞を述べた三中卒業式  
昭和44年老齢病臥して欠席した中井はこの色紙を卒  
業生に贈る。神韻縹渺 (P. 54参照)



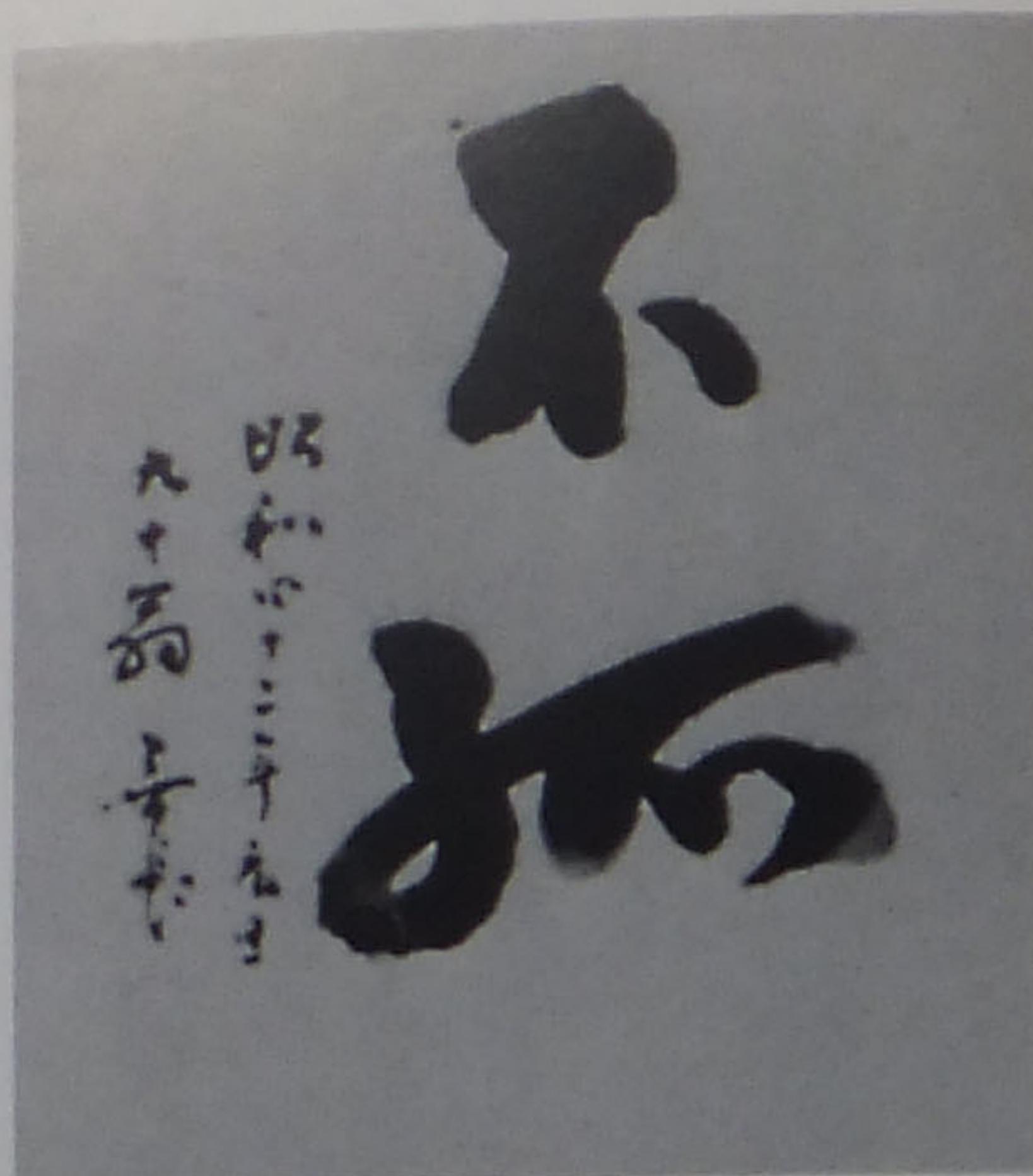
昭和初期の同窓会

壮年の中井を囲む三中初期の在京卒業  
生たち  
ああ、まこと、明治は遠くなりにけり。



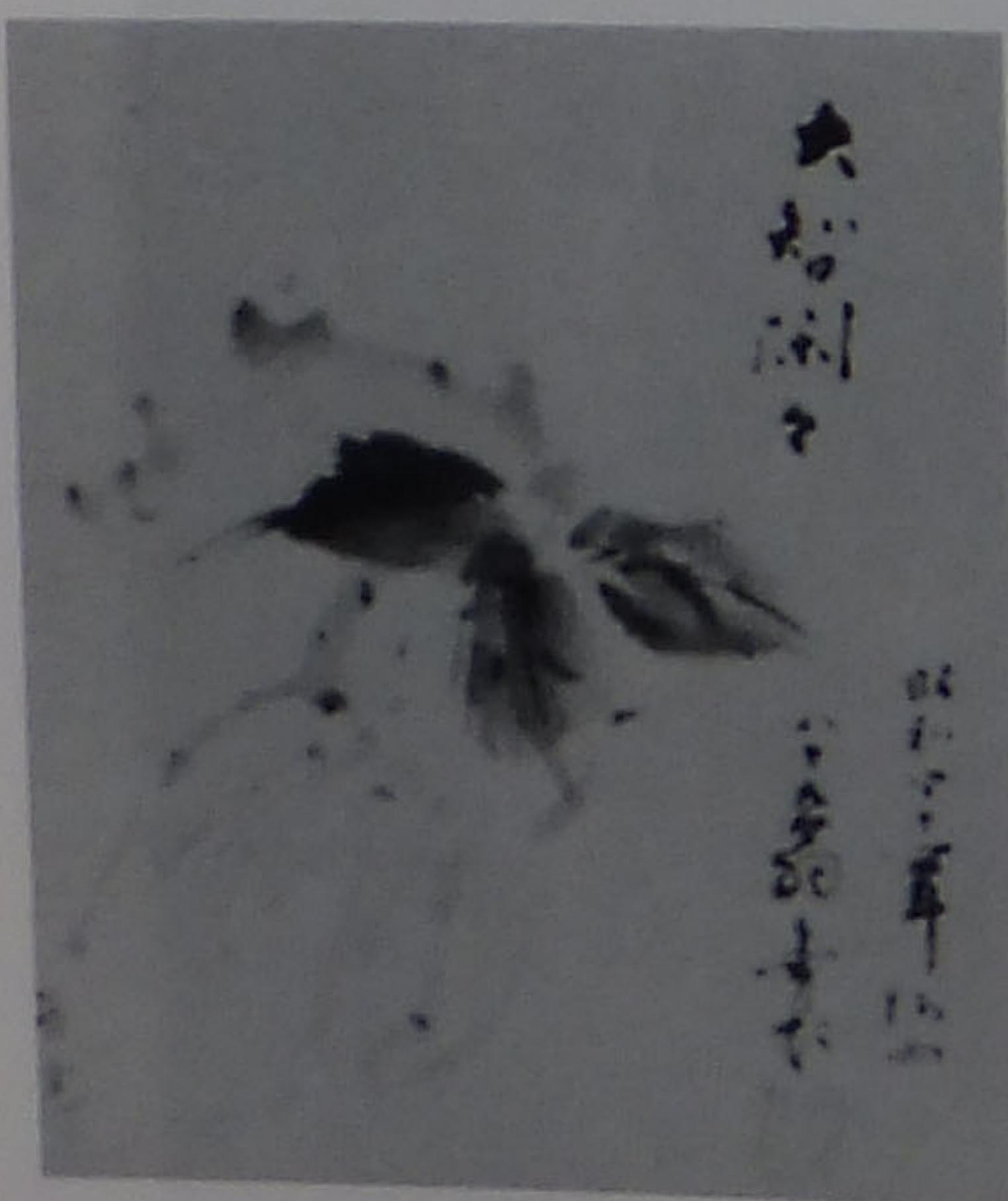
書の色紙

中井が揮毫した色紙、  
条幅などの書はいずれ  
も典雅で深い味がある。  
(P.86 参照)



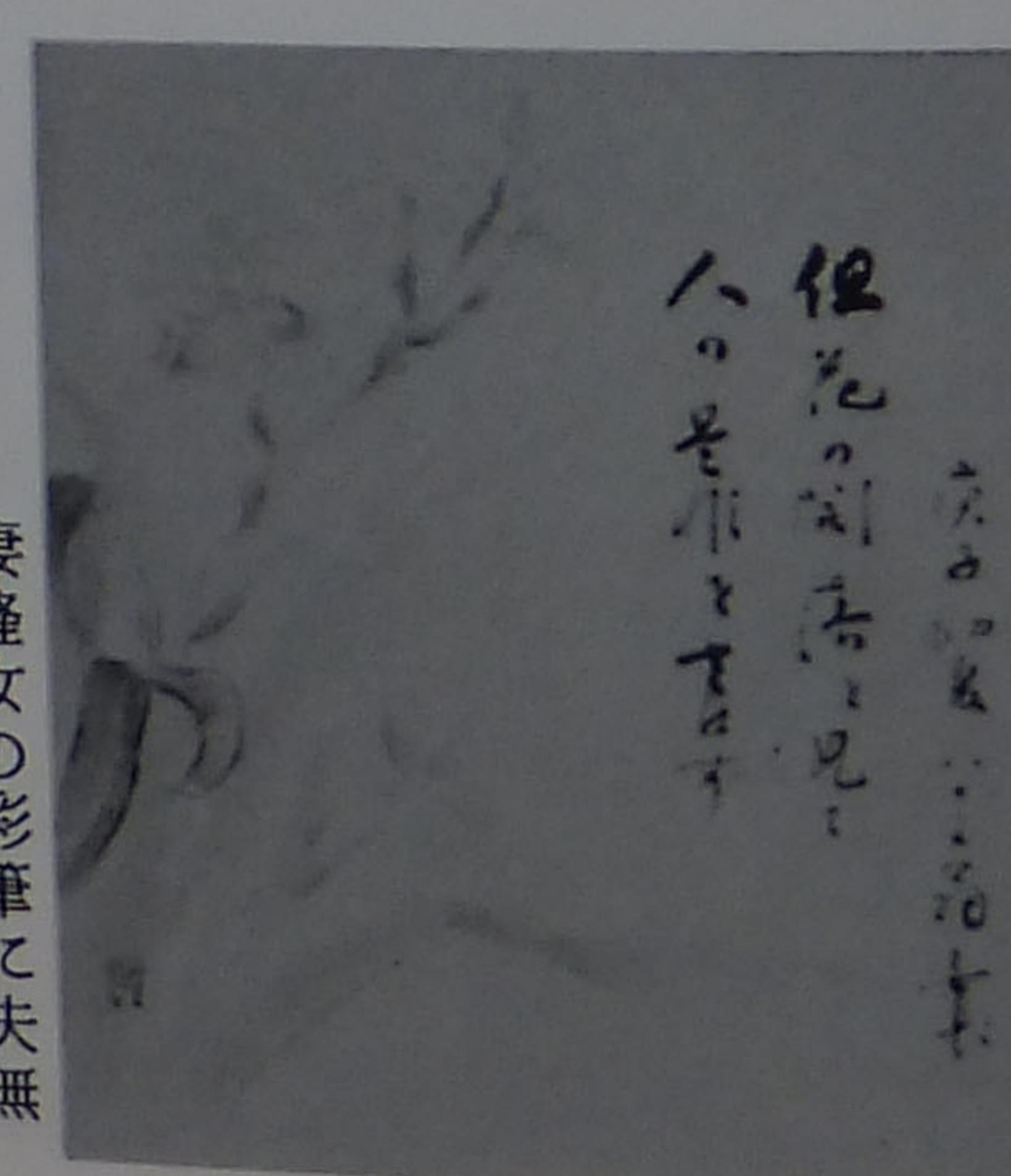
書の色紙

中井が揮毫した色紙、  
条幅などの書はいずれ  
も典雅で深い味がある。  
(P.86 参照)

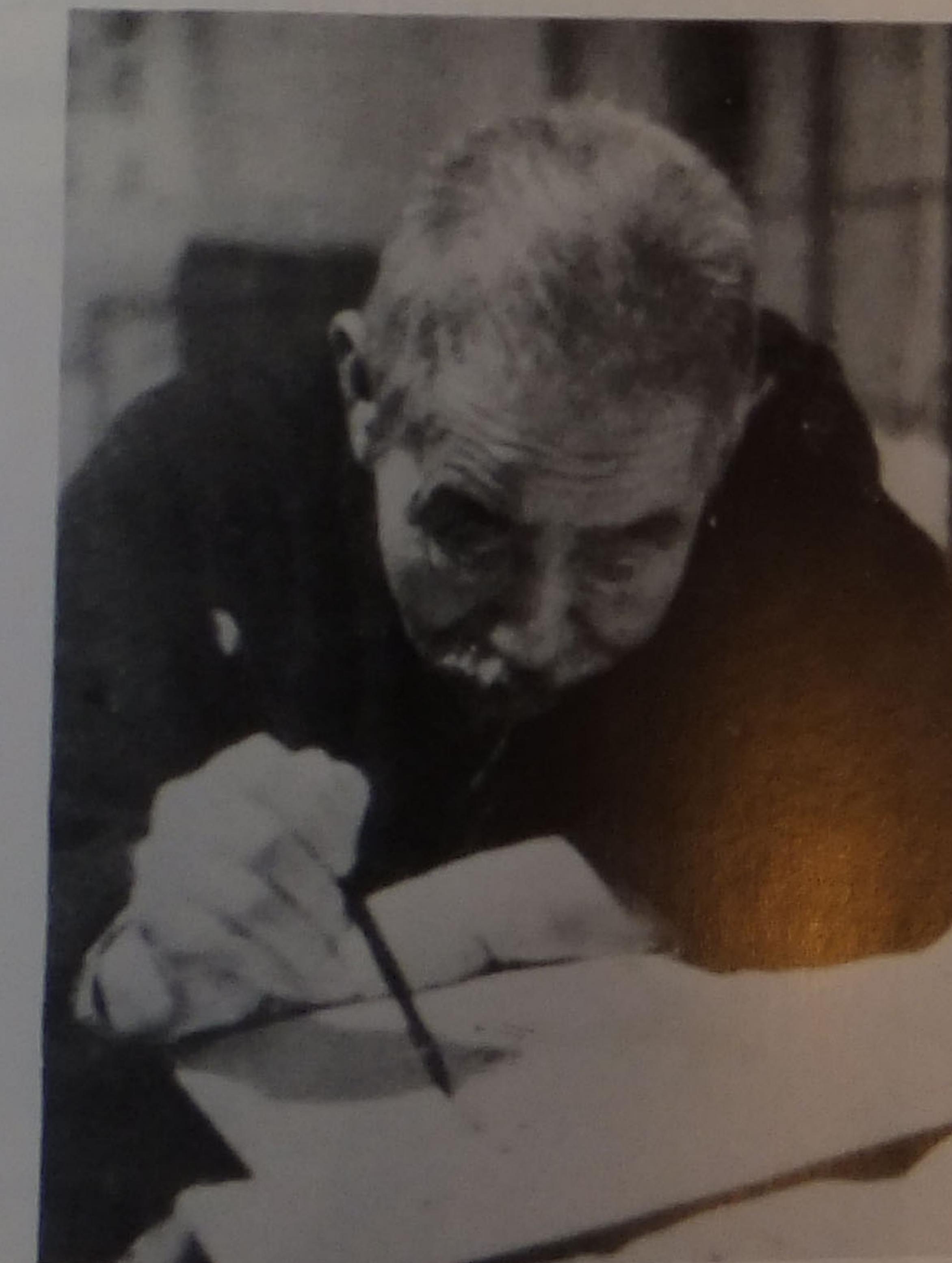


夫婦合作色紙

妻隆女の彩筆に夫無  
長の贊。呼吸びつたり。  
巧まずして自ら風雅  
の道に合す (P.58・86)



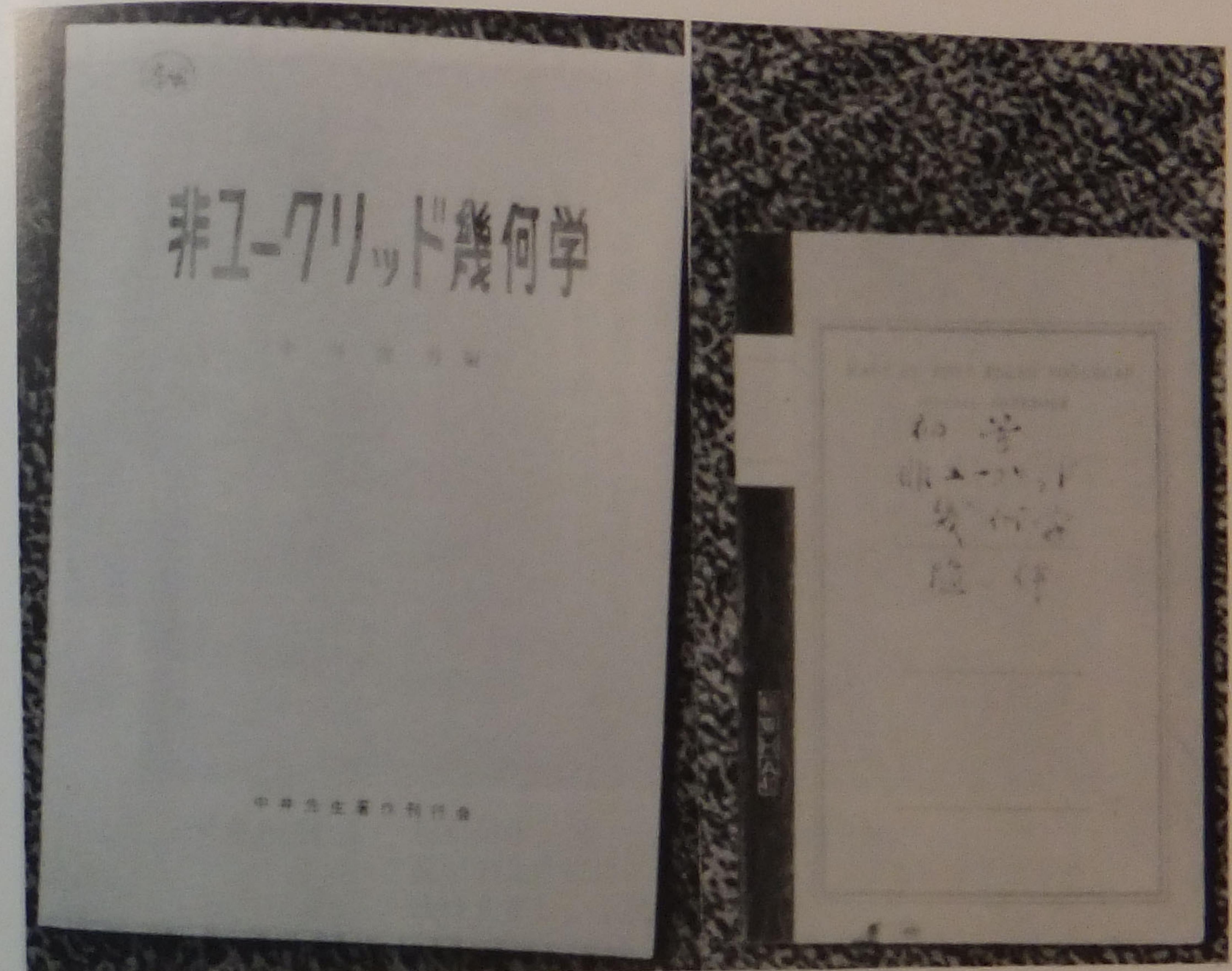
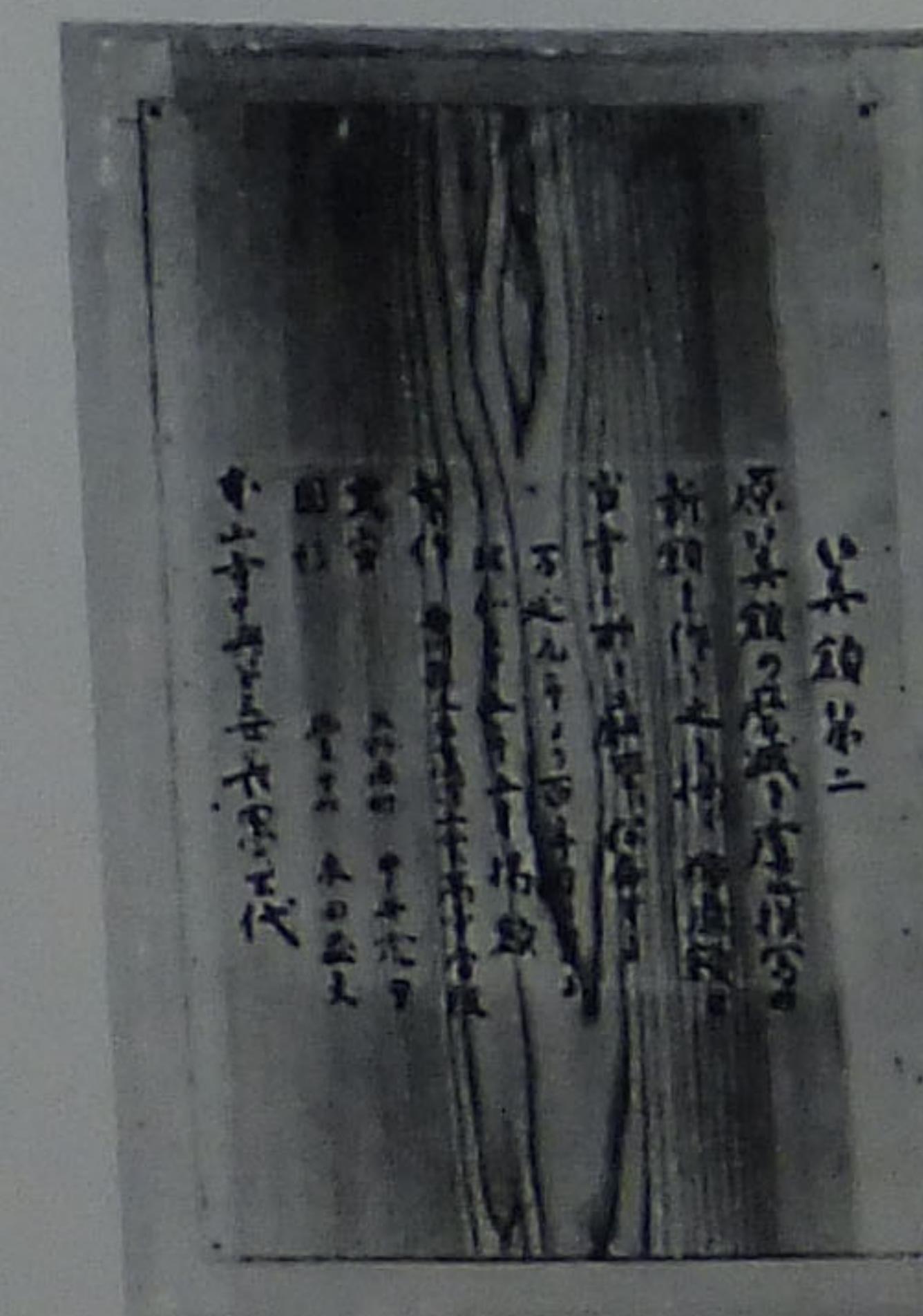
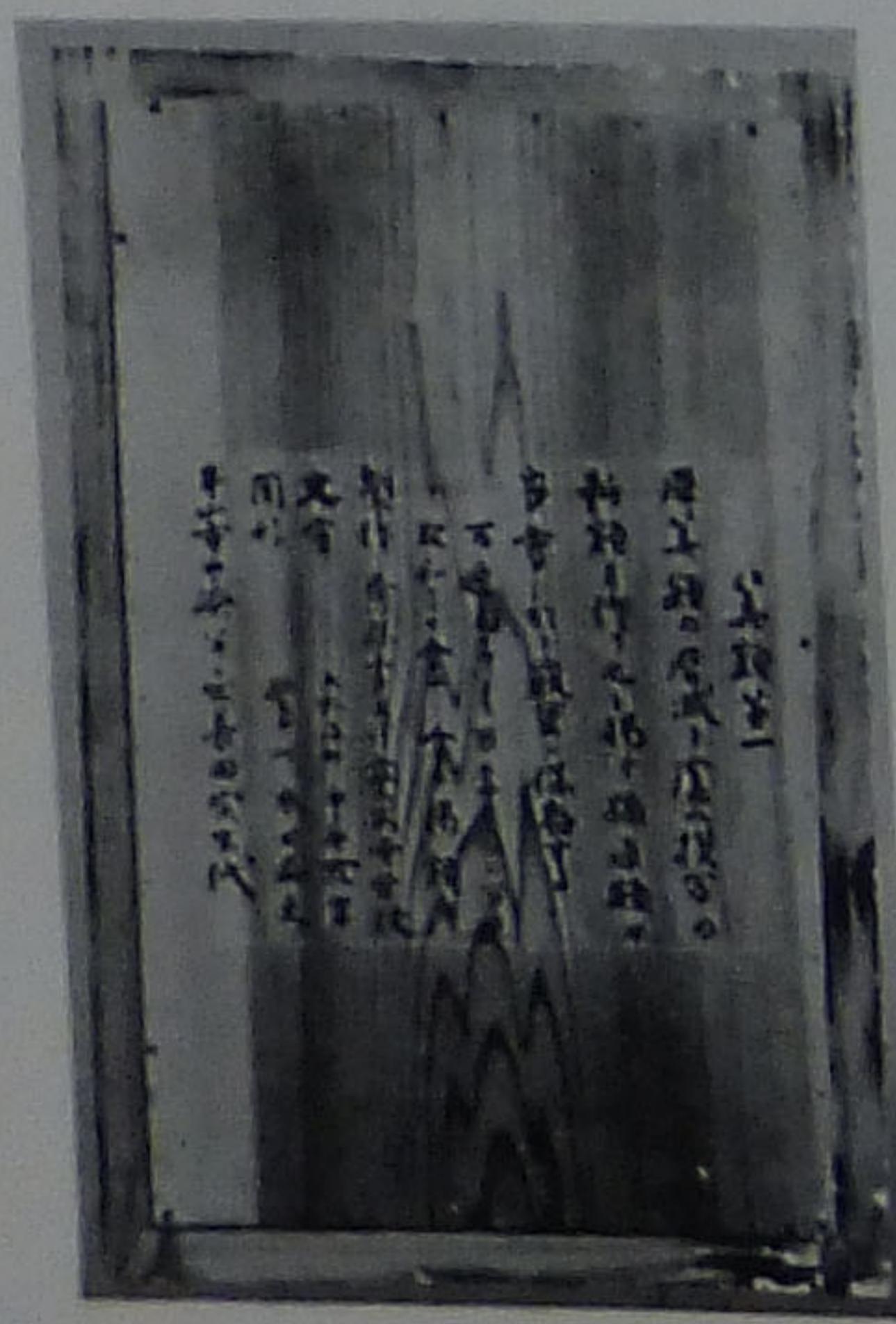
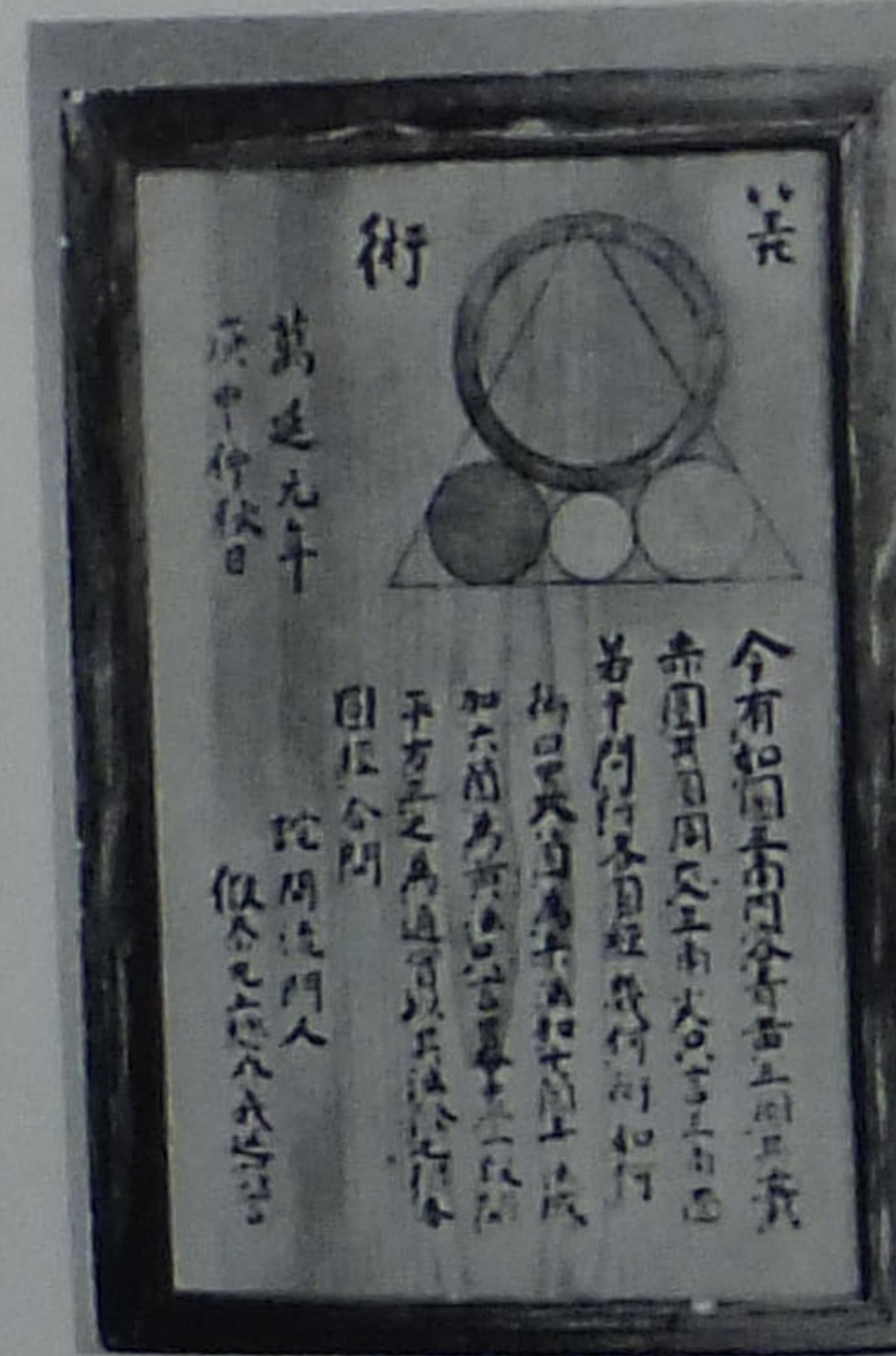
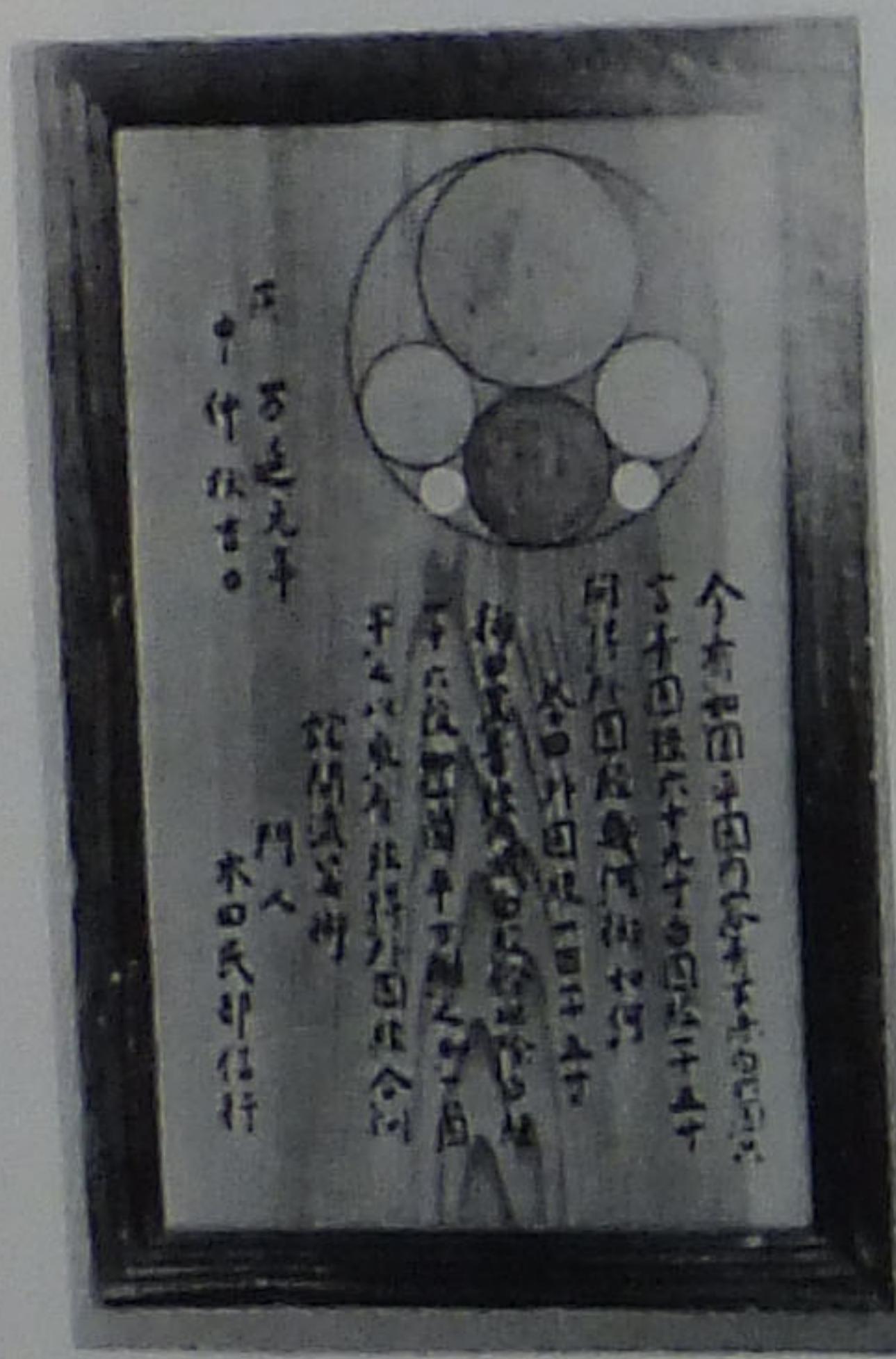
米寿祝賀会 昭和40年2月 三豊中学同窓会主催  
童児のようにはにかんであいさつする好々爺中井老  
ほほえまし。( P.86参照 )



書にしたしむ  
無心に筆執り、淡々と紙に向う。筆  
の跡は中井の人間そのままで玄妙に  
して枯淡。( P.86参照 )

本山寺算額

上二枚は万延元年奉納の原額  
中二枚は中井らの模写した新額  
下二枚は新額裏書（P.67参照）



「非ユークリッド幾何学」 明治末期から翻訳に取り組み、研究を重ね、遂に昭和35年に刊行。  
数学界注目の書（P.70参照）



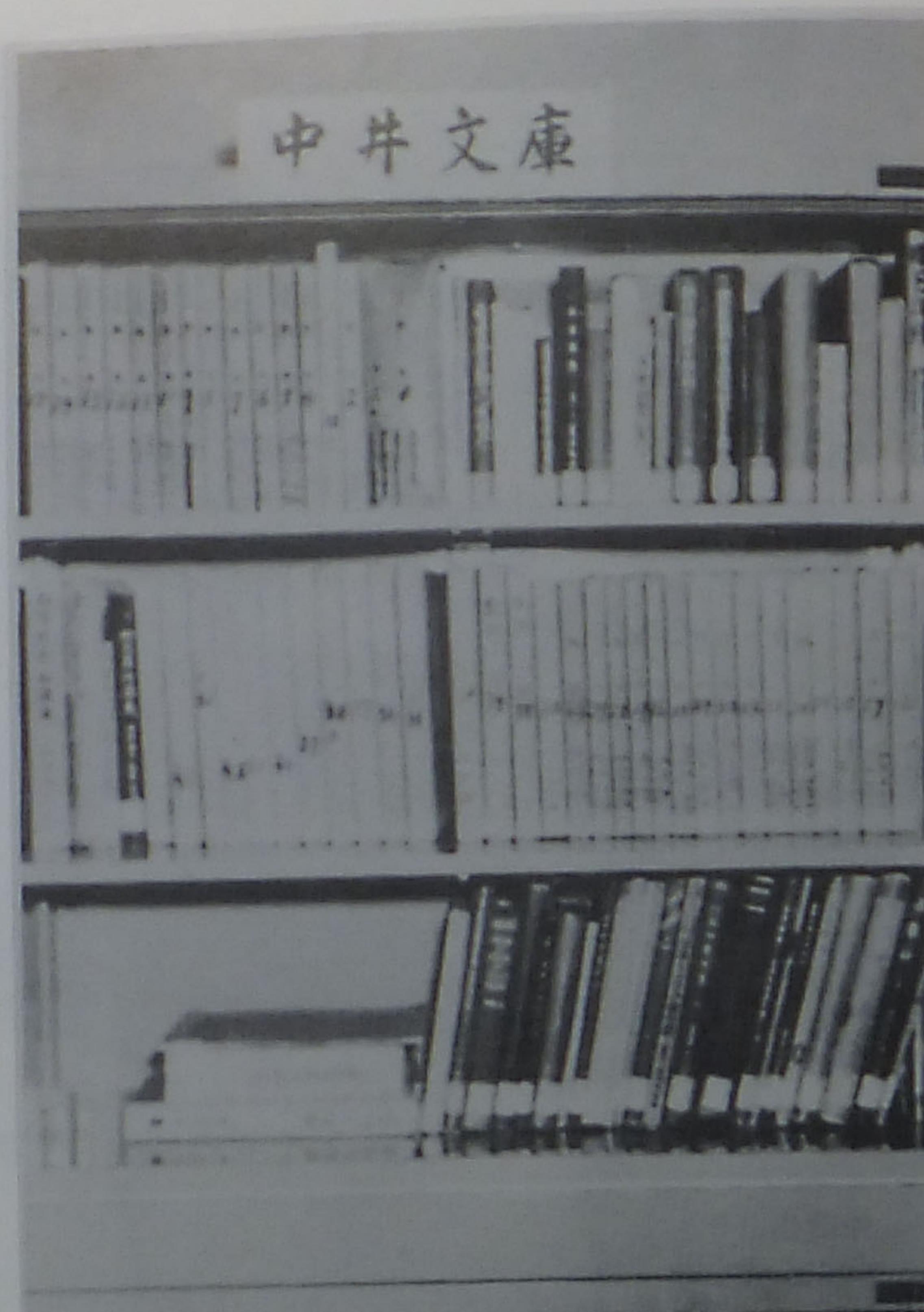
算額究明

本山寺に奉掲されていた算額を発見した中井はその解法を究明、日本数学史学会の下平会長らと共に同寺を訪ね、県下の和算啓蒙のきっかけを作った。（P.69参照）

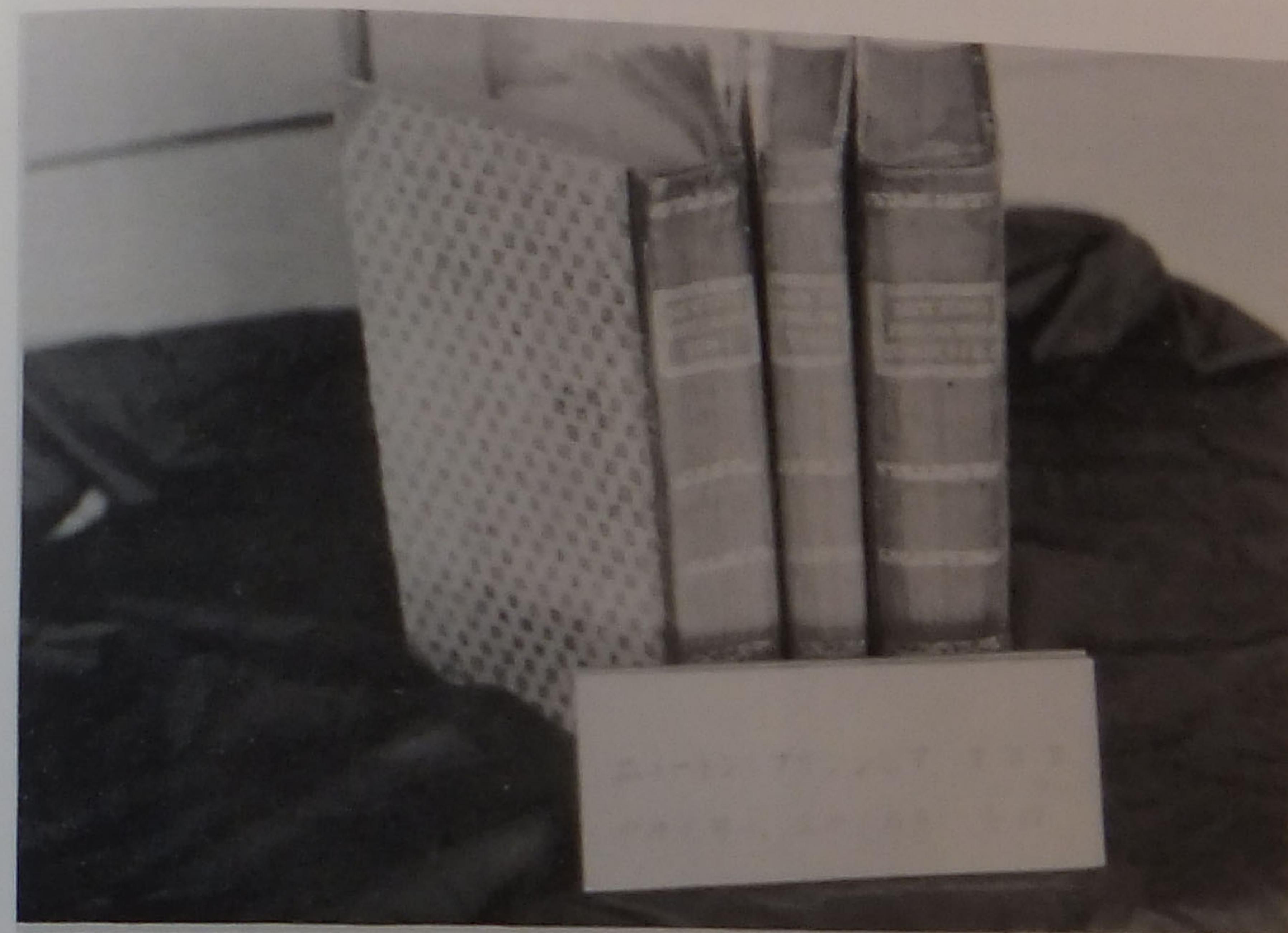


三中第一四回卒の中村一氏（大阪貿易学校長）が、趣味の画才を生かし、恩師を描いた油絵。観一資料館蔵。

「中井文庫」  
（P. 88 参照）



昭和四一年一一月中井は  
愛蔵していた書籍二二六  
冊を観一高へ贈った。  
校は「中井文庫」とした。  
( P. 88 参照 )

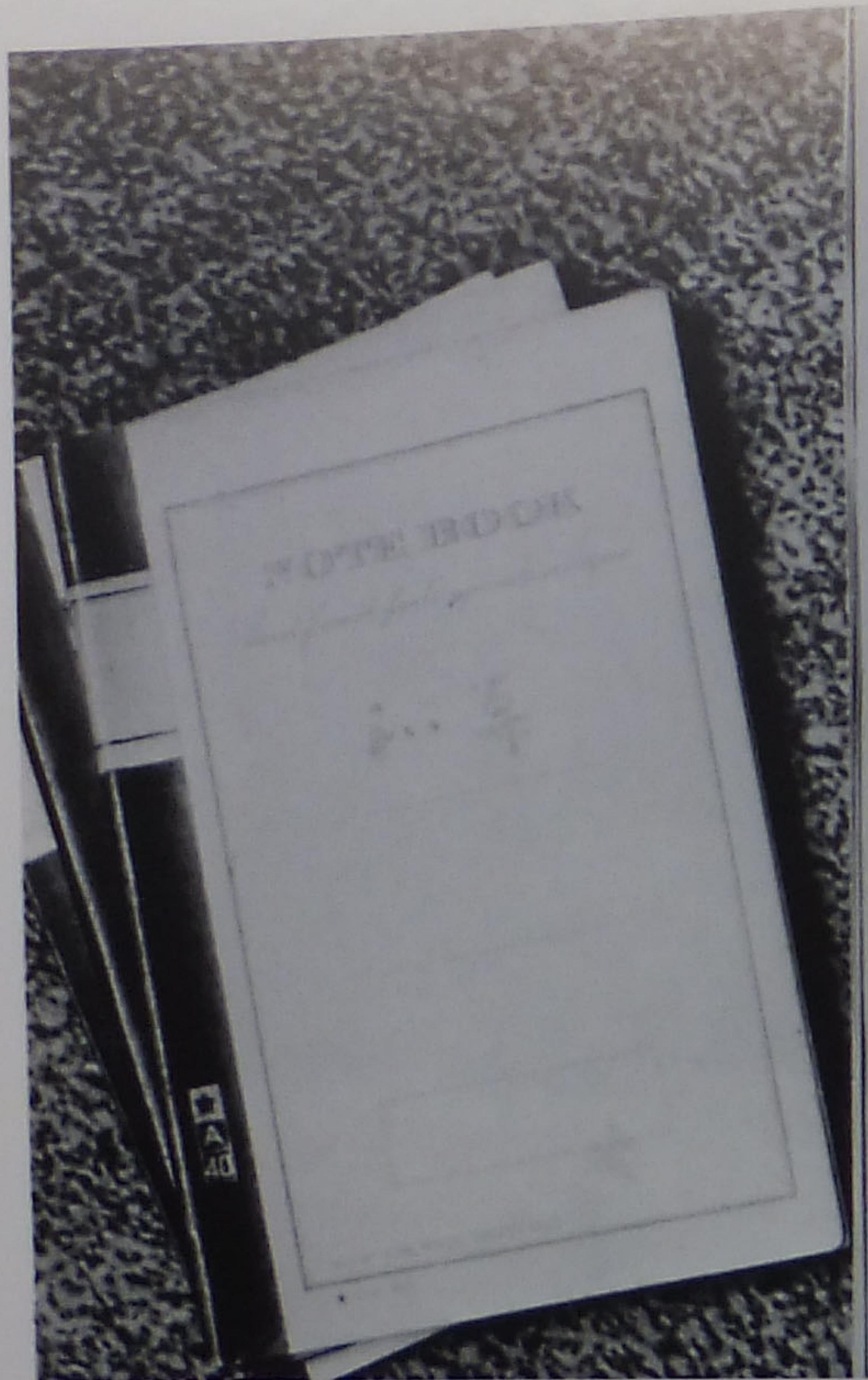


「プリンシピア」 中井が弟子の松永陽之助博士から贈られたのを  
観一高へ寄贈した誠に貴重な書籍。

( P. 64 参照 )

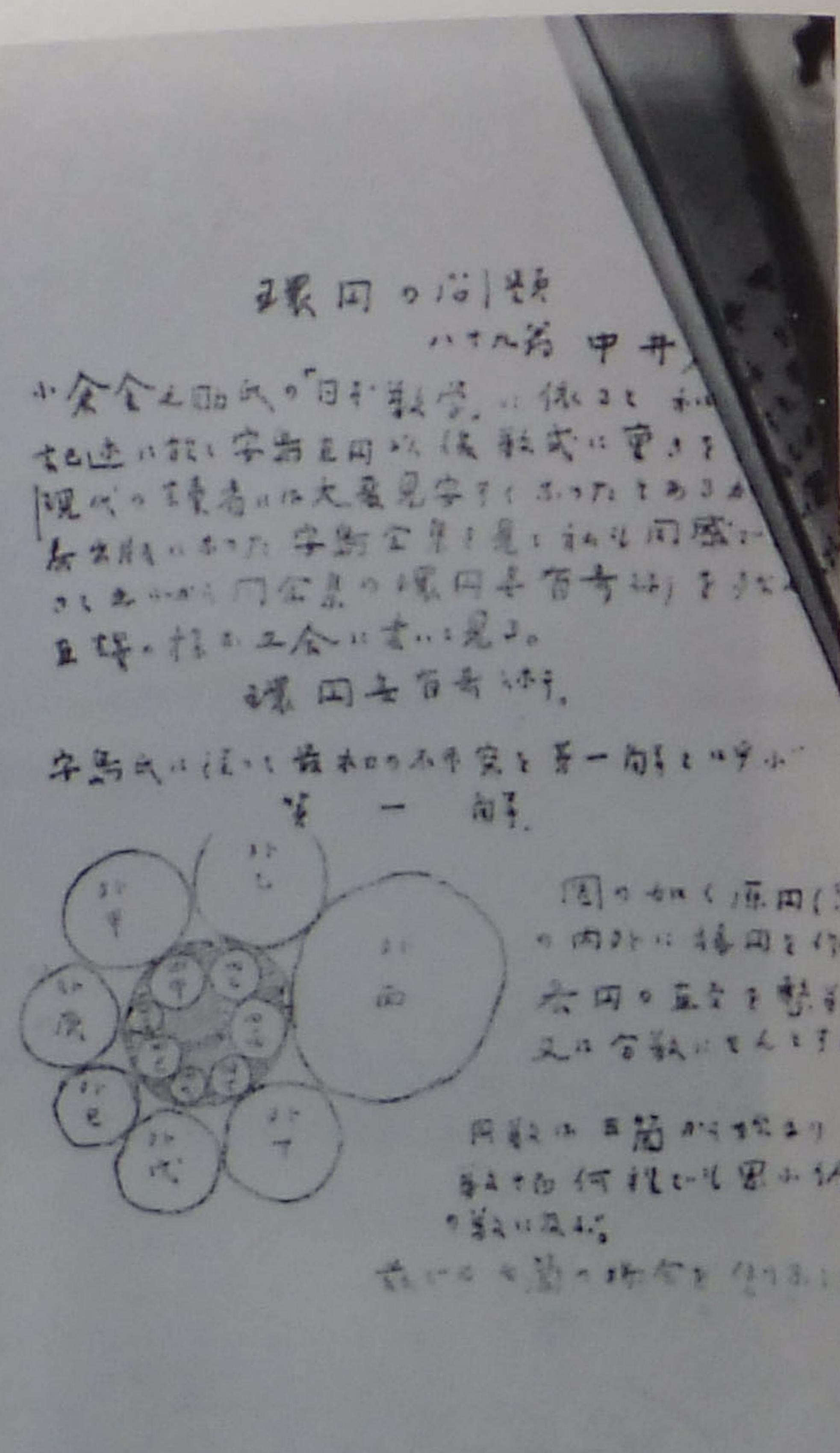
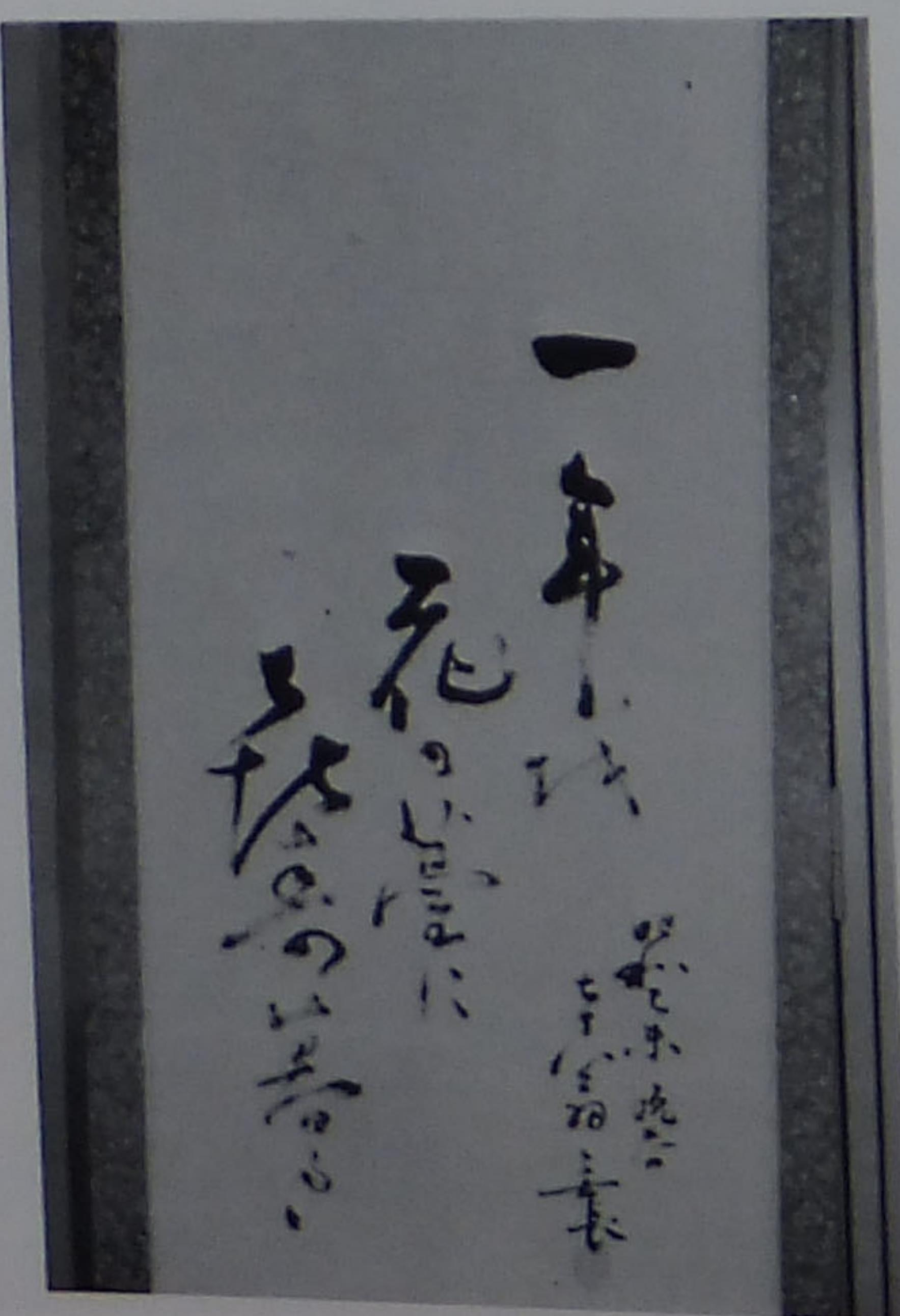


ガリレオ全集など 中井がプリンシピアを観一高へ寄贈した  
美學に感動して松永博士が同校へ贈った  
書物。（ P. 64 参照 ）



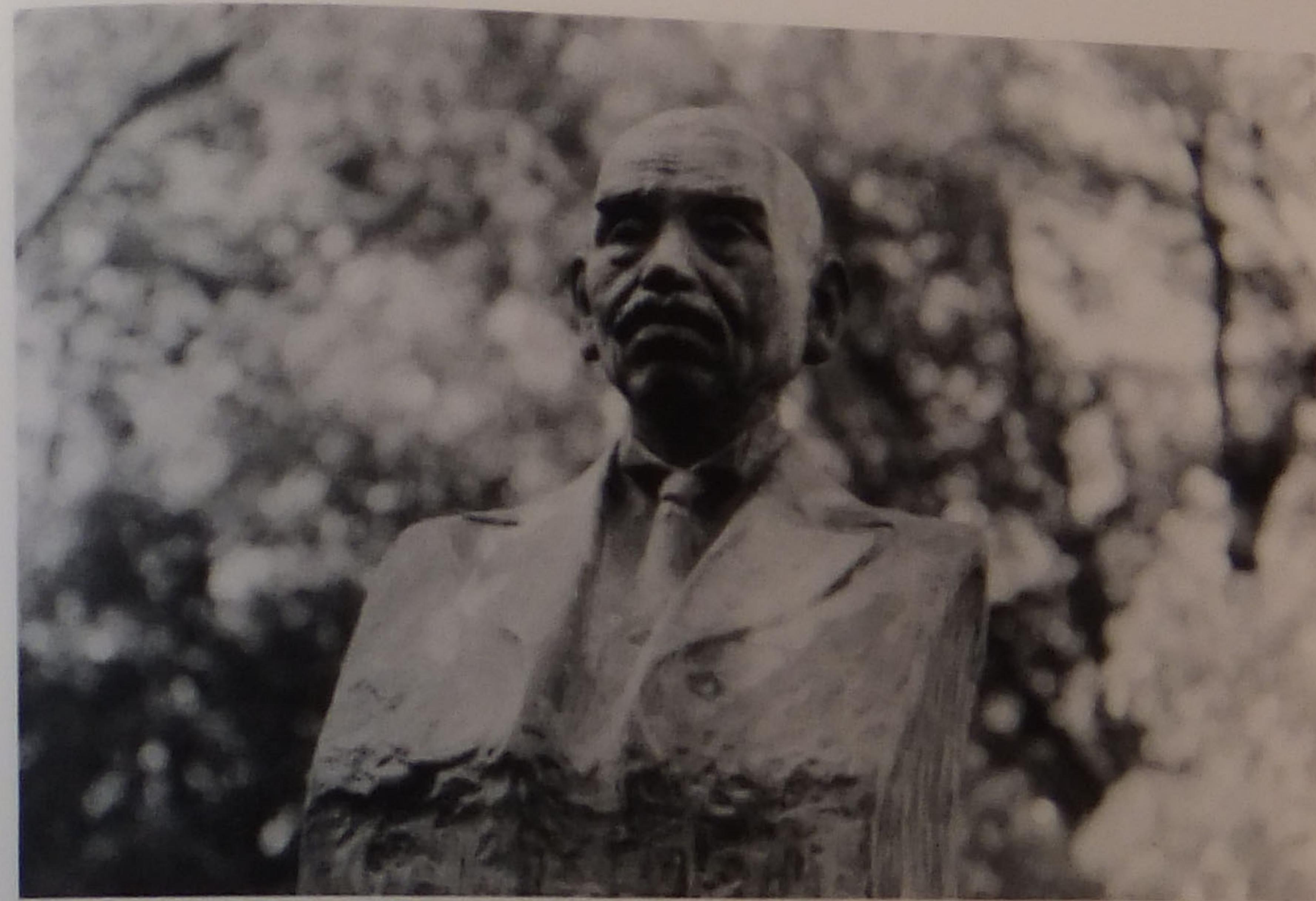
中井の条幅

昭和三十一年乙未の晩春。  
知友に贈った自作の句。  
枯淡玄妙



中井ノート

中井が晩年に使っていたノート。市販のありふれた品だが、生涯にわたって数学に取り組んだ姿がうかがえる。(P. 59・84 参照)



胸像 昭和45年10月復原され、観一高正門近くの樟樹の蔭に立ち、同校の来し方行く末を見る中井虎男胸像。(P.35, 48参照)



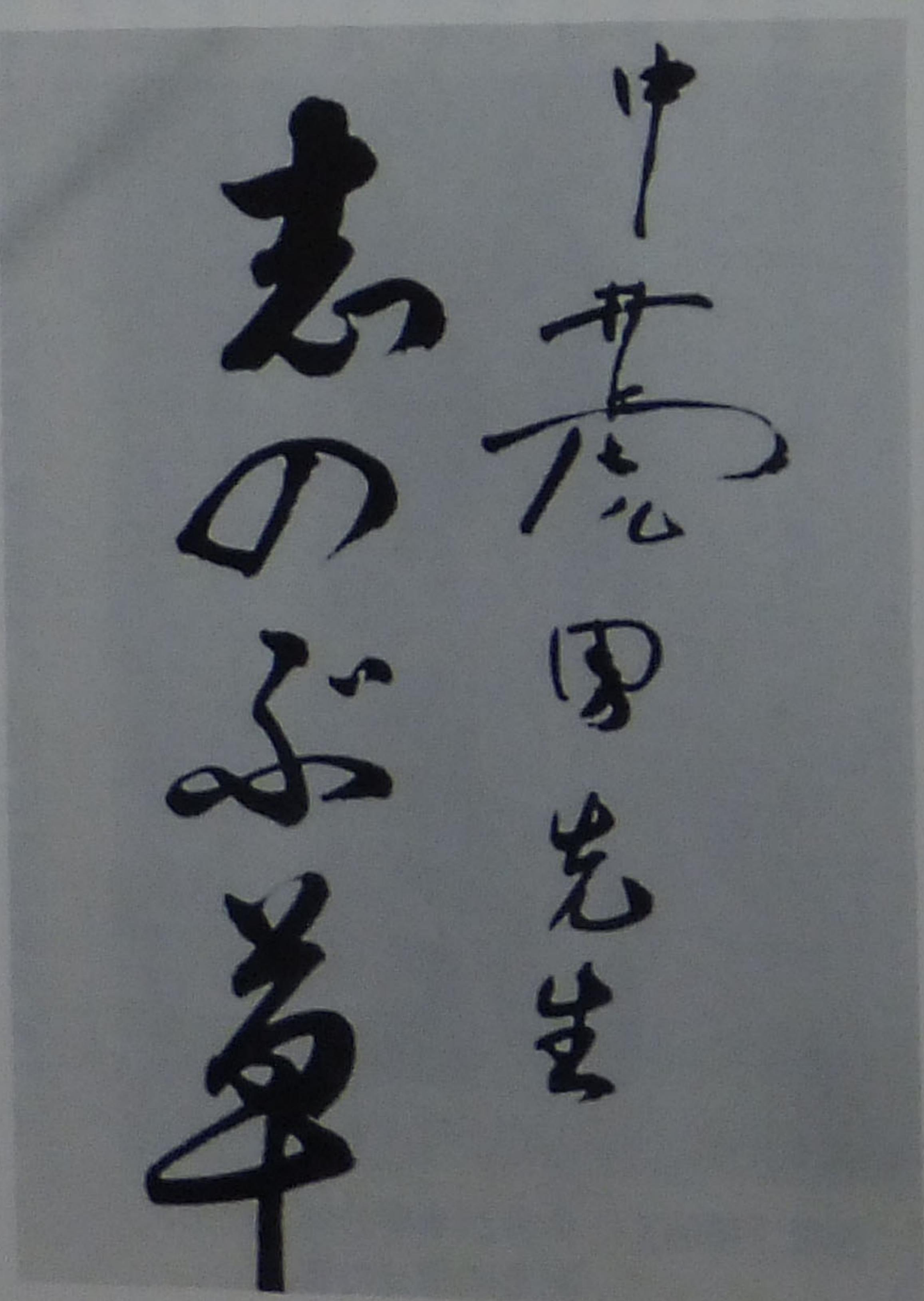
幻想中井先生

川崎市在住の田中裕輔(三中第35回卒、毎日新聞連載小説のさし絵担当)が、中井を頭において描いた。観一高体育館入口に掲ぐ。



鳴門行

加藤藤太郎氏が中井夫妻を  
富岡工場へ招待した途次、  
鳴門公園展望台にて



追悼文集  
「志のぶ草」  
(P.53 参照)

中井を偲ぶ座談会の速記録と多数の追悼文を  
集録した至情溢れる本。  
昭和四五年十月発行。  
(P.53 参照)



合同葬

昭和四四年一〇月一七日、大野原中学校体育館における大野原町・觀音高窓会の中井虎男合同葬。悲痛哀悼の参列者（P.52 参照）



墓碑  
「道一筋」

大野原町慈雲寺墓地の中井夫妻の墓。  
墓碑正面の「道一筋」の三文字が中井の崇高な生涯を表わす。（P.53 参照）

## 序文

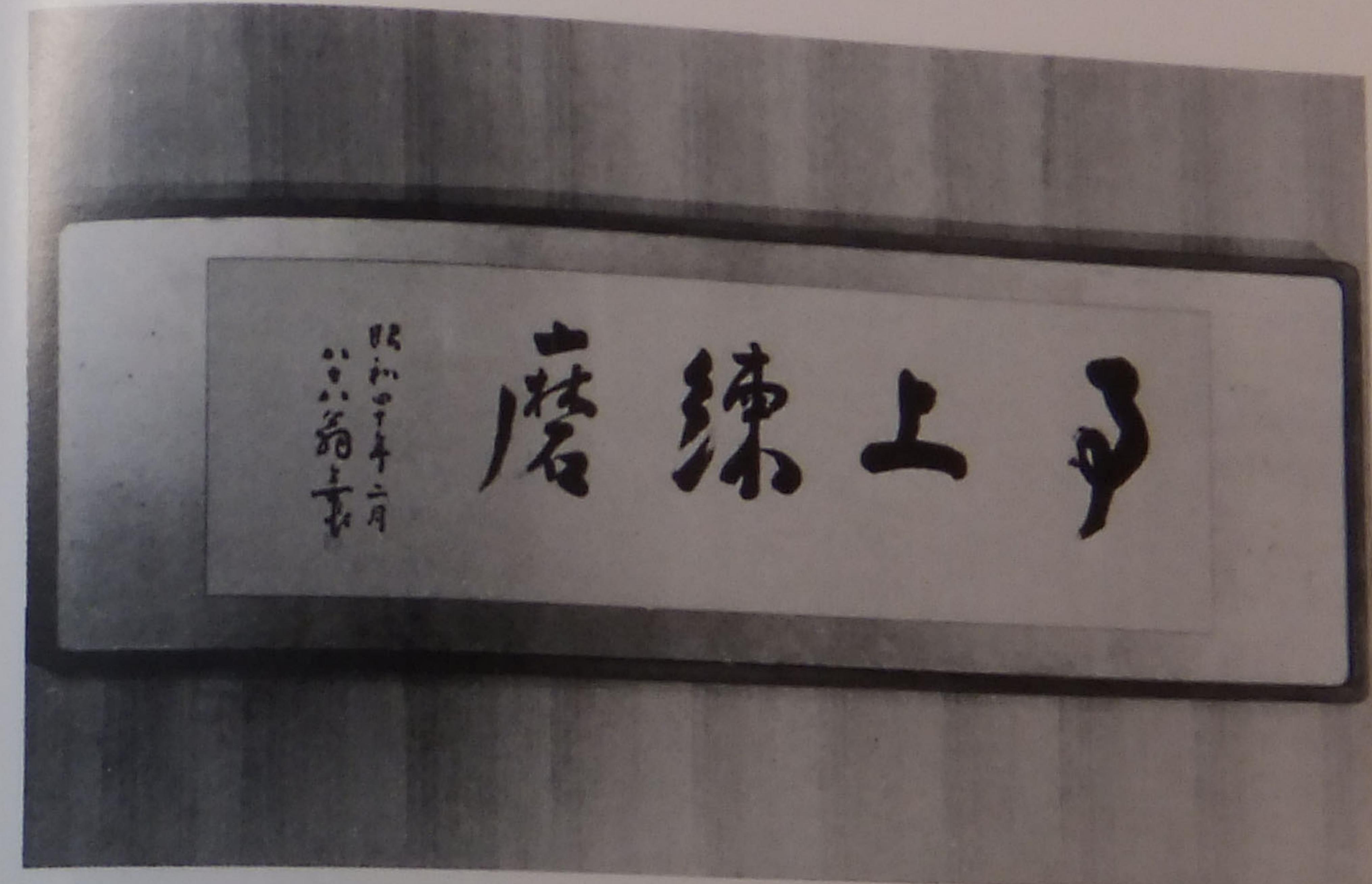
### 無長中井虎男先生を偲ぶ

中井虎男先生（雅号無長）を景仰する者は、先生に直接指導を受け恩師子弟の間柄にあった者は勿論、先生に接した人々等郷土を中心にして、数え切れない程いるといつても過言ではない。その人格、人間愛、師弟愛と、私利に無縁の生活態度が、接する人々に与えた教訓と薰化は測り知れないものがあったのである。

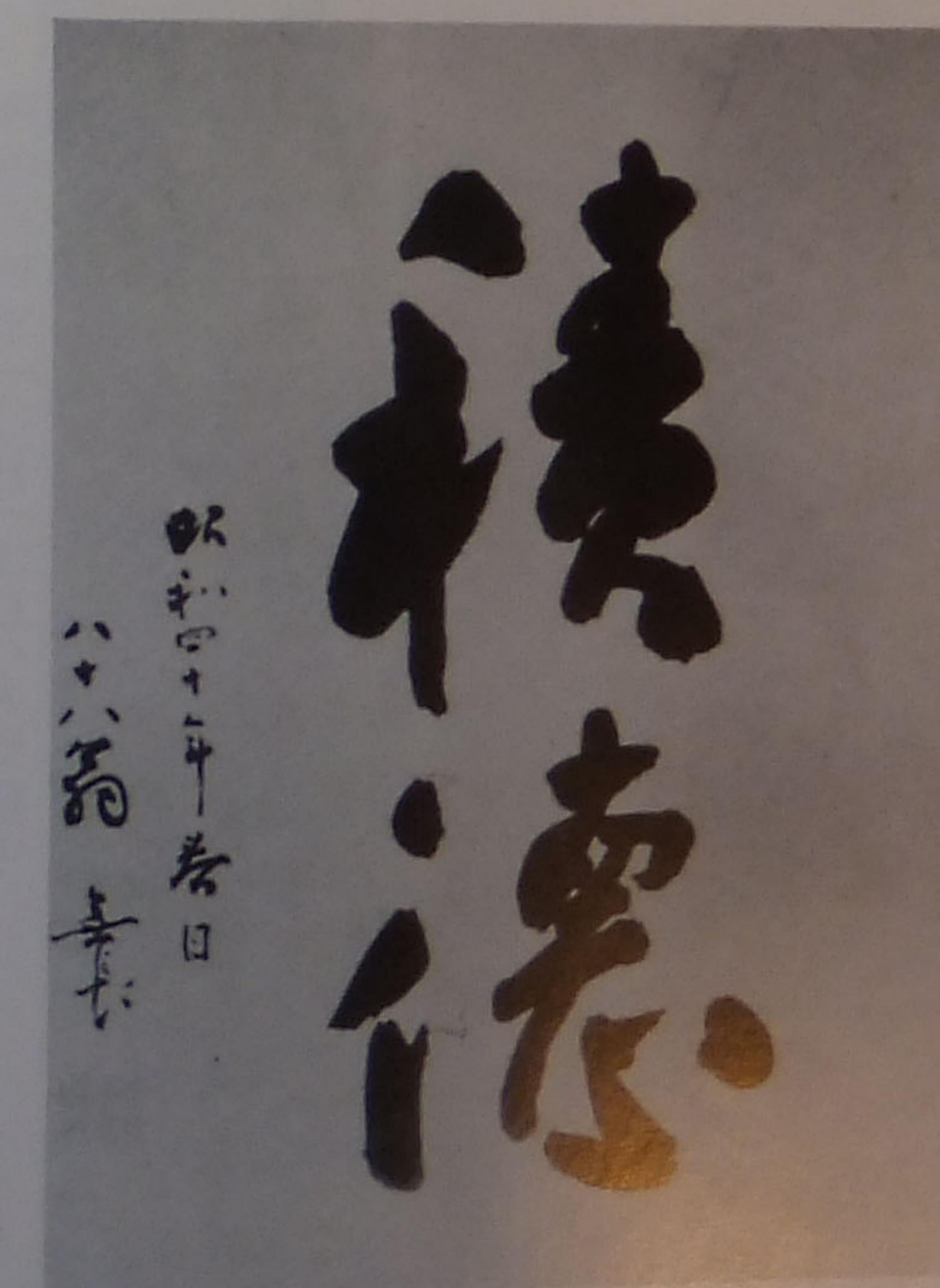
先生は高等数学の優れた研究者であり、数学教育者として令名を残されたことは、あまねく知られている所である。県立三豊中学校（現観音寺第一高等学校）の教師として教壇に立つこと実に三十年。その間直接先生の指導を受けた卒業生二千数百名は、生涯先生の教えを身につけ偲び続けているのである。同校退任後居村の大野原村長に推され、厳しい戦前戦時下の自治体行政に挺身され、名村長とうたわれたことは今も同町内に語り伝えられている。

先生は専門の数学のほか、漢籍にも詳しく、俳句をよくせられ、書にも堪能、囲碁道においても練達の有段者であり、相撲の理解者爱好者でもあった。そして、これらのどの道においても同好の士や、指導を受けた後輩から鑽仰せられていた。誠に人間としての巾の広い偉大な人物であった。

先生は生前「回想三豊中学」を著された。三豊中学在任中の同校の校史を詳細に述べ、各年度の卒業生について懐しそうに語つておられるが、同時にこの書は自伝的要素も含んでいて、一気に読了させる名著であった。この書が世に出た後、次はぜひ先生の伝記を作らなければいけないと多数の声が起った。三豊観音寺教育会は、一つにはこの要望に答えるべく、又一つには本会の事業である「郷土先賢の顕彰」のため「中井虎男伝」を刊行することにした。昨春編集委員会を構成し、以来委員は仕事を分担して連絡し合いつつ、鋭意資料に基いて執筆



中井が創立三周年の同校へ贈った書。  
同校では校訓に採り教育の基本にする。  
創立20周年記念にこの句の碑を玄関に置く。



色紙「積徳」 中井が米壽の春、門弟に  
記念に贈った書。

に当った。その間委員一同は、改めて中井先生の偉大さを痛感し、この仕事にたずさわることに誇りを感じた。

こうしてここに上梓の運びに至った。本書が中井先生の遺徳を偲ぶよすがとなることを心から希望し、かつ期待するものである。

なお、先生を敬慕してやまない神崎製紙KK加藤藤太郎元社長様から貴重な序文を頂いた。誠に感謝に耐えな

い。その上、今回も、本書の写真ページ及び本文用のすべての用紙を、加藤翁のご好意により同社からご寄贈頂

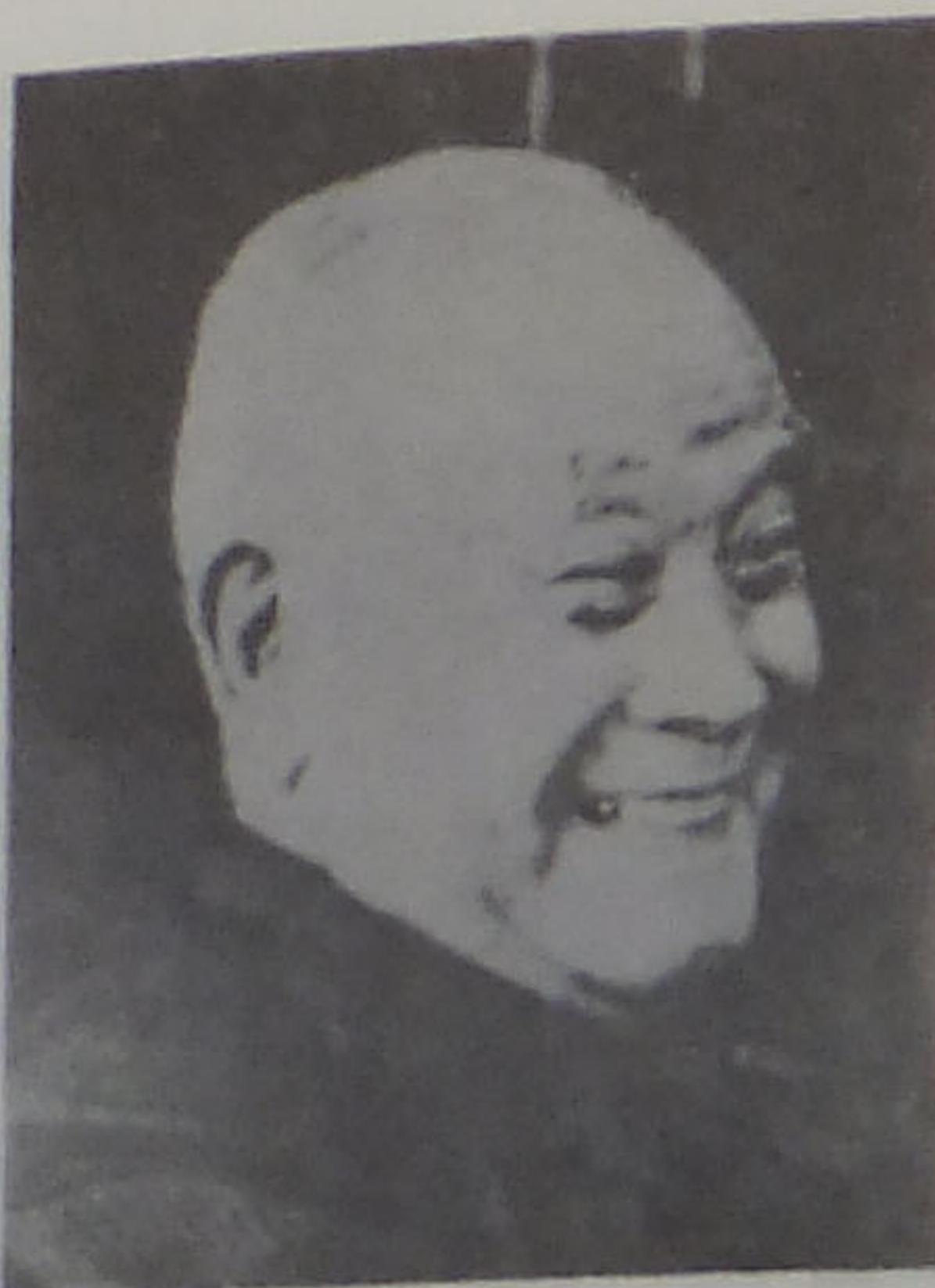
き、本書の出版に多大のご協力を賜わった。謹んでご報告申し上げると共に衷心より謝意を表する次第である。

また、先生の甥に当る市原善積氏と薦田良知大野原町長の両氏から玉稿を頂いた。厚くお礼を申し上げる。

最後になりましたが、本書刊行の趣意にご協賛、ご支援頂いた各団体並各位に対し、深甚の謝意を表したい。

昭和五十八年一月十八日（先生生誕百五年目の日）

三豊觀音寺教育会長 本 益 夫



## 生涯の師 中井先生

加藤 藤太郎

このたび、中井先生の伝記が刊行されることになり、改めて中井先生を偲ぶよすがが出来ることは、ほんとうにうれしいことです。

私は、今年満九十五才になりました。おそらく御存命の方々の中で、私ほど長く、また深く御指導戴いた者はいないと思います。

私が入学した頃の三豊中学は、まだ創立間もなく先生も充分揃っておられませんでした。その時に中井先生が赴任して来られたのです。数学は私達が何を質問しても、即座に、正確に、判り易く教えて頂き、その深い学識に驚いたものです。

私は、夏休みにずっと先生の御宅で代数を教えて戴きました。そして、終わつたあと、先生のほんとうに含蓄のあるよいお話をとうかがいするものがたのしみでした。

その後、私は郷里を離れてからも、帰郷の都度かならず先生をお訪ねして、お話にいつも深い感銘を受け、先生のようないい人柄に一步でも半歩でも近づきたいと思い続けておりました。

社会に出まして、恩師の話をし合つた時、私は何時も中井先生のお話を聞いて、そのたびに皆にうらやましがられましたし、私も先生を恩師に持つたことをどんなに誇らしく思つたか判りません。

先生の喜寿のお祝いの折に、先生は私にみごとな達筆の色紙を下さいました。

世の温情に生きて 喜寿の春

私は、その有難さをしみじみと感じました。その折受けた強い印象が私には忘れられず、それ以後機会ある度に、先生の訓えを思い出し、私自身も過分に今日ある世のお蔭を感じて、少しでもそれに報いたいと念じて来ました。

このように先生の教えを受けたことは数限りありません。ほんとうに私の生涯は先生のご指導によって導かれたと思

います。

また、先生は、いつも、地位を求めず、榮誉を追わず、文字通り眞実一路のご生涯でした。

これらのことが、つぶさに伝記に盛られていることだと思います。

この伝記が、中井先生を知っている方には、その良い思い出となるために、中井先生に接する機会のなかつた方には、少しでも多く、少しでも深く先生を理解し、感銘を受けられるために役立てていただければうれしいことです。

（ 県立三豊中学校第二回卒業、現一橋大学卒業、王子製紙KK副社長を経て神崎製紙KKを興し  
社長会長を長く勤め現在相談役。財團法人 加藤渾学財團最高顧問 ）



## 目次

### 写真（一五ページ）

序文	無長中井虎男先生を偲ぶ	本田 益夫
生涯の師中井先生		加藤藤太郎
名家のひとり息子		一
少年のころ		一
青雲の志		四
生い立ち		五
三豊中学三十年		八
明治時代		八
第一歩／師弟一如／病氣休職		八
冷水浴／中井の授業		一一
大正時代(1)		一三
校旗と興風集		一三
第一号オルガン／教師三昧		一四
大正時代(2)		一六

教えて倦まず／うどん  
和に徹す／松茸狩

一六  
一九

教授嘱託の時代／創立二十五周年事業

二五  
二二

大正時代(3)  
愛息の死を耐えて／大演習のころ  
教育は感化である

二三  
二二

昭和時代

二五  
二二

教育者としての姿／三中との別離

二七  
二九

寿像の建設とその変遷／三中と道一筋

四七  
三六

著書「回想三豊中学」

## 村長時代から晩年へ

村長十年村民の父

三九  
三九

世のため人のため

四三  
四三

威徳をたたえて

四七  
四七

叙位叙勲／三豊中学校胸像

四九  
四九

県知事表彰／名譽町民第一号

五一  
五一

彰徳寿像

五〇  
五〇

天寿九十有二年

五一  
五一

巨星墮つ／永遠の別れ

英靈ここに眠る／志のぶ草  
良き妻ありて——夫人隆女  
たつ子夫人と愛息友和／中井との結婚  
婦人会長十五年／社会のために  
著書あれこれ／偕老同穴

## 中井と数学

道一筋を行く

六一  
六一

展示「道ひとすじ」／数学史の研究

六五  
六五

研究は天文学にも及ぶ

六六  
六六

算額の究明

六七  
六七

熱意の結集「非ユークリッド幾何学」

七〇  
七〇

隨想三篇

七四  
七四

偲迺舎の教育

八一  
八一

## 広く深い人間像

雅号「無長」

八四  
八四

俳句と書画

八五  
八五

浪曲・相撲・碁

八六  
八六

徳之所施者博

八八  
八八

観一高「中井文庫」

八八  
八八

大野原中学校の天体望遠鏡と「中井文庫」

八九

人材を育む——中井の育英活動

九一

追慕記二篇

中井の叔父さんを偲ぶ

九一

発刊を謝して

九三

年譜

九五

あとがき

九七

題字 本田 益夫  
用紙 神崎製紙株式会社寄贈  
見返 中井先生夫妻合作色紙

## 生い立ち

### 名家のひとり息子

香川県の西端に近い大野原町は、昭和三十年に大野原村・五郷村・萩原村・紀伊村（一部を除く）の四か村が合併してできた町である。このうち大野原村は、明治の中頃までは大野原村・花畠村・中姫村の三つの村に分かれていた。この中で大野原村は江戸時代の寛永年間に開発された比較的新しい村である。その大野原村の中央部に下木屋という集落がある。

中井虎男は、明治一一年一月一八日この下木屋の旧家中井家で父勘平、母チカの長男として呱呱の声をあげた。寒さきびしい冬のさ中であったが、中井家にとってはじめての男児出生は、両親にとってどんなに嬉しかったことだろう。また、六つになる姉春江も、三つになる次の姉イマも弟の誕生を夢中になつて喜んだ。

明治一一年といえど、明治四年の廢藩置県によつて香川県が生まれ、それが一年余りで名東県（今の徳島県）に併合され、さらに二年半で分離して香川県（第二次）となり、翌年また愛媛県に吸収されてから二年目の年である。「名東（夫婦）別れて愛媛に身売り香川は再び里帰り」という俗謡が歌われていた頃であり、あの西郷隆盛の西南戦役の翌年のこと

である。

虎男の父勘平は、虎男が生まれた時三六才の男盛りであつた。虎男の祖父が中風になつたため、わずか一三才の時に庄屋の家をゆずられ、祖父が死んだため一七才の若さで家督を継いだ。明治五年に庄屋・組頭を廃し、戸長・副戸長を置くようになつた時、大野原村の戸長に平田織彦がなり、それを助ける副戸長には勘平がなり、虎男が生まれる前の年からは戸長をつとめた。明治二三年に町村制が施行され、大野原・花畠両村が合併して大野原村ができた時、その初代村長となり、三一年まで八年間その職にあつた。そして、虎男が三豊中学校教諭になつてまる一年後の、明治三八年の四月一日に六二才でなくなつた。

虎男の母チカは、丸亀藩士市原善兵衛の長女である。虎男の著書から引用すれば、「性分はなかなかしゃかしゃかしておつたようで、質を取つて利殖を計り、母一代の間に多少の田地も買い、人並みの資産を作つた」というしつかりした人であった。その反面、やさしい人であつたようでもある。虎男が三豊中学校へ勤めるようになつてから、毎日のように家から二三丁離れた道端の一本松（切られ

父 中井 勘平  
夫 妻